

中部の

エネルギーを 築いた



大井川の流域開発と 大倉喜八郎

大倉喜八郎は、1837(天保8)年、現在の新潟県新発田市に生まれた。1854(安政1)に江戸麻布の中川鯉節店に奉公し、3年後に独立して乾物店を開いた。当時、風雲急を告げる横浜を視察し、鉄砲の売買に注目し、1867(慶応3)年、神田に鉄砲店を開業した。明治維新後、時代の趨勢を見て鉄砲の時代から新時代に適する外国貿易に転業することを決め、鉄砲店を閉店した。



創立者 大倉喜八郎(明治35年)
(出典：東海パルプ90年史)

1871(明治4)年、欧米各国の商工業視察に

出かけ、その途中、明治政府の欧米視察団、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文など政府要人との面識を得て帰国した。そして1873(明治6)年、日本人による貿易商社・大倉組商会を設立し、翌年ロンドン支店を開設した。明治7年の台湾出兵に際しての兵站輸送請負を皮切りに、明治10年の西南戦争の兵站輸送請負、韓国貿易の開拓などを行った。このように大倉組は軍需品の調達、輸送を手始めに土木・建設事業等を起こして巨利を得た。

東京電灯(株)など多角的な事業分野に投資

大倉喜八郎は、貿易商社で稼いだ資金を、化学(日本化学工業)、製鉄(東京製綱、山陽製鉄所)、繊維(帝国繊維)、食品(日清製油、大日本麦酒)、土木建設(大成建設)など数多くの企業を興し大倉財閥を築いた。また、渋沢栄一とともに鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場などを設立、さらに、現在東京経済大学の前身・大倉商業学校の創立などに私財を投じた。この中で、日本最初の電灯会社・東京電灯

会社は、1883(明治16)年に設立され、大倉組内に創立事務所を置き、1886(明治19)年に開業した。開業当時の取締役社長は矢島作郎(東京貯蓄銀行頭取)、取締役に大倉喜八郎はじめ4名、技師長に藤岡市助が就任した。当初の資本金は20万円(2,000株)で、喜八郎は2万円(200株)を出資して2番目の大株主となった。その後、都内に5か所の電灯局(火力発電所)を建設し発展した。

井川山林の取得など大井川流域の開発

井川山林は東西13^{キロメートル}、南北32^{キロメートル}に及ぶ広大な山林である。林地内には大井川の源流、間ノ岳(3,189^{メートル})、悪沢岳(3,141^{メートル})、赤石岳(3,120^{メートル})等の高峰があり、シラベ、カラマツ、カツラ、ケヤキなどの針葉樹、広葉樹に覆われた木材資源の宝庫である。

大倉喜八郎は、1895(明治28)年、この井川山林を男爵、酒井忠博から立木とともに5万円で取得した。そして、

- ①井川山林の原木資源活用
- ②井川水系での水力発電計画
- ③島田または金谷での製紙工場建設計画

等の基本構想に基き、1907(明治40)年に東海紙料株式会社(現在：特殊東海ホールディングス株式会社)が設立され、島田工場と地名発電所の建設を決めた。

(1) 東海紙料(株)地名発電所

島田碎木パルプ工場は明治43年5月に完工したが、地名発電所の建設が遅れたので、電力は完成直後の日英水力電気(株)小山発電所から送られた。

地名発電所(出力：2,250kW)は、大井川水系2番目の発電所として明治43年10月に運転を開始した。水車は、ドイツのフォイト社製(1,600馬力2台)、発電機はアルゲマイネ社製(1,000kW2台)の最新式設備であった。発電所は暴れ大井川の豪雨による被害が相次ぎ、維持管理には多大な労力と費用がかかったと言われる。



大井川鉄道・地名駅の南にある地名発電所跡

(2) 笹間渡発電所

笹間渡発電所(出力：4,030kW)は、地名発電所の取水口、水路を利用し、総工費152万2,000円をかけ、昭和6年に完工した。当時の紙パルプ業界は不況のどん底にあり、発電所の建設を進めることができたのは、井川山林の木材売上げが貢献した。

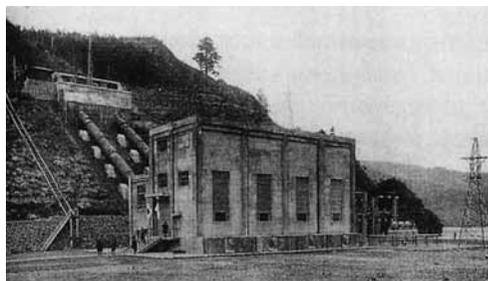
また、当時は電力過剰の時代であり、笹間渡発電所の運転開始とともに地名発電所を廃止(昭和27年、出力1,000kWで運転再開)し、余剰電力は東京電灯や川根電力索道などに送った。



大井川・鶴山の七曲りにある笹間渡発電所跡

(3) 東海パルプ(株)地名・笹間渡発電所と中部電力(株)赤松発電所の交換

1951(昭和26)年、東海紙料は東海事業(株)を経て東海パルプ(株)に社名を変更し、また、電



完成した笹間渡発電所(昭和6年)



大井川と地名・笹間渡発電所
(出典：東海パルプ90年史)

力事業は電力再編成により中部電力株が発足した。そして、大井川流域の電源開発は、第2次世界大戦後の電力不足で急ピッチに進められ、中部電力の川口発電所と塩郷ダムが計画された。この建設が始まると、ダム下流にある地名・笹間渡発電所は運転できなくなるため、中部電力と東海パルプの間で協議され、

静岡県知事の斡旋により、赤松発電所(出力：6,000kW)が1957(昭和32)年に完成した時点で、地名・笹間渡発電所と交換されることになった。赤松発電所は、大井川最下流の発電所で、島田市の近郊にあり、水路は農業用水路として利用されている。

(資料：大井川の電源開発の推移)

大井川の電源開発の推移

	発電所名	出力	事業会社	備考(大井川鉄道関連)	
1910	明治43	小山発電所	1,400	日英水電	
1910	明治43	地名発電所	2,250	東海紙料	
1931	昭和6	笹間渡発電所	4,030	東海紙料	金谷～千頭間全通(39.5km)
1935	昭和10	湯山発電所	22,200	第二富士電力	
1936	昭和11	大井川発電所	62,200	大井川電力	
1938	昭和13	大間発電所	16,000	富士電力	
1944	昭和19	久野脇発電所	32,000	日本発送電	
1949	昭和24				金谷～千頭間 全線電化
1956	昭和31	奥泉発電所	87,000	中部電力	
1957	昭和32	井川発電所	62,000	中部電力	
1957	昭和32	赤松発電所	6,000	東海パルプ	
1959	昭和34				井川線開業(千頭～井川～堂平26.6km)
1960	昭和35	川口発電所	58,000	中部電力	
1961	昭和36	畑薙第二発電所	85,000	中部電力	
1962	昭和37	畑薙第一発電所	137,000	中部電力	
1971	昭和46				井川線(井川～堂平間1.1km 廃止)
1990	平成2	赤石発電所	39,500	中部電力	アプト式区間(アプトいちしち～長島ダム・1.5km)開業
1995	平成7	二軒小屋発電所	26,000	中部電力	
1995	平成7	赤石沢発電所	19,500	中部電力	
2001	平成13	東河内発電所	170	中部電力	

なお、大倉喜八郎は、生前に将来の東海紙料のため笹間渡発電所を建設せよと言って、

1928(昭和3)年、90歳の高齢でなくなった。遺言に従って赤石岳の頂上で風葬を執り行った。

大倉喜八郎(1837～1928)の略歴

1837	天保8	越後国新発田の名主大倉千代之助の3男に生まれる
1854	嘉永4	江戸の鯉節店に奉公
1857	安政4	独立し、乾物店を創業
1867	慶応3	大倉銃砲店を開業
1871	明治4	店をたたみ翌年欧米視察。欧州滞在中に岩倉使節団と交流。
1873	明治6	日本人による貿易商社、大倉組商會を設立
1883	明治16	東京電灯株設立、取締役役に就任(資本金：20万円、そのうち10%所有)
1893	明治26	合名会社大倉組を設立
		日本土木會社を引継ぎ、大倉土木組(現在：大成建設)を設立
1895	明治28	井川山林取得
1900	明治33	私財50万円を投じて大倉商業學校(現在：東京經濟大学)を設立
1907	明治40	東海紙料株を設立し、取締役會長に就任。資本金：100万円
		このほか数々の會社を設立、多くの事業を展開し大倉財閥として発展
1910	明治43	大井川水系・地名水力発電所運転開始
1915	大正4	男爵位を授かる
1917	大正6	日本初の私立美術館大倉集古館開設
1926	昭和1	南アルプス赤石岳に登山
1928	昭和3	勲一等旭日大綬章を受章
		92歳の天寿を全うする
1931	昭和6	大井川水系・笹間渡水力発電所運転開始
1961	昭和36	大井川水系・赤松水力発電所を取得、地名・笹間渡水力発電所を廃止

(寺沢安正)